# 主イエスに向かって

羽入田悦子

聖書には印象的な場面が随所にあります。その連続と言うべきかも知れません。そのような中で私が最近特に心惹かれている二つの場面があります。

その一つはマルコ福音書１０章で、道端で物乞いをしていた盲人バルティマイが、主イエスが通りかかられることを知って、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫び続けるところです。周りの人々が止めますがバルティマイは聞かずにますます激しく叫び、それを耳にされた主イエスが立ち止まって「あの男を呼んで来なさい。」と言われることになるのですが、私が特に心惹かれるのはこの後、「主がお呼びだ」と聞かされたバルティマイが上着を脱ぎ捨て、躍り上がって主イエスの所へ跳んで行く場面です。

もう一つはヨハネ福音書２１章で、復活された主イエスが３度目に弟子たちに姿をお見せになるガリラヤ湖畔での場面です。既に二度弟子たちは復活の主にお会いしているのですが、恵牧師のお説教によりますと、主を見捨てて逃げたことへの後悔やユダヤ人に捕まるのではないかとの恐怖で彼らは疲れ果てていたということで、この時も生きる気力を失ったままのように思えます。そんな中でペトロ以下７人が、漁に出かけます。ペトロを含む彼らの大半はかつて漁師だったのですが、一晩かかっても何も獲れず諦めようとした矢先、岸に立っておられた主が「舟の右側に網を」と言われ、その通りにすると引き上げられないほどの大漁となったのです。ここで私が心惹かれるのはこの後、湖のほとりに立っておられるのが主イエスだと知らされたペトロが、自分が裸であることに気づき上着をまとって湖に飛び込み、主イエスに向かって泳ぎ出す、という場面です。

この二つの場面を何度も思い浮かべている内に、私はこの二つの場面には共通のものが二つあることに気づきました。その一つは上着です。バルティマイの上着ですが、牧人牧師のお説教によりますと、当時ユダヤでは施しを受ける者はその目印として水色の上着を着なければならなかったそうで、それを身に着けて命を繋いでいる人々にとってはそれはまさに生きるための命の綱ということだったのです。ところが「主がお呼びだ」と聞いたバルティマイは、それまで自分の命の綱であった大切なその上着を放り投げて、主に向かって走って行ったのです。彼の主イエスへの圧倒的な信頼が明らかになる場面です。このようにバルティマイは上着を脱ぎ捨てるのですが、ペトロは反対に脱いでいた上着を身に着けます。上着を着て泳ぐのは苦しいことだろうと思うのですが、裸で主の前に立つことは出来ないというペトロの主イエスに対する思いが見えてうれしくなります。

もう一つ共通しているもの、それは二人が共にお立ちになっている主イエスに向かって突進して行くところです。目の見えないバルティマイは何かにぶつかるのではないかと心配になるのですが、何の迷いもなく上着を捨てて主の元へ駆けて行きますし、ペトロもかつて主イエスと共にあった時の勇敢なペトロに戻って躊躇など一切なく、上着をまとって夜明けの湖に飛び込み、主に向かって抜き手を切って行きます。二人揃って主イエスに突進して行くのです。この後、バルティマイは癒されて主イエスに着き従い、ペトロは湖岸で主イエスによって整えられた朝食を他の弟子たちと共にいただきます。そして後日、聖霊を受けた弟子たちは宣教に立ち上がることになるのです。

この二つの場面を思い浮かべる時、私はいつも温かな思いに満たされ、心が弾むのを覚えます。そして、それと同時にあの時二人の前にお立ちになっていた主イエスが、２千年を経た今、私の前にもお立ちになっていてくださることに気づかされるのです。すべての人の前に主がお立ちになっていることを確信させられるのです。残念ながら私の信仰は二人に及

ぶべくもなく、その上年齢を重ねてしまいましたので、彼らのように突進することは出来ませんが、お立ちくださっている主イエスに向かって、ただひたすら弛まずに歩ませていただきたい、その思いを日々新しくさせていただくのです。